

エンカウンター (ENCOUNTER)

第223号

2020年11月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://agape.wig.jp/encounter/>

佐生健光『キリスト教と称名』より (8)

アルトハウス先生という言葉

Thankfulness means to recognize his dependence, P.Althous

感謝とは、おかげであるということを知ることである。

注 P.Althous (1888-1966)

ドイツのルター派神学者。オーバスハーゲン生まれ。ゲッチンゲン大学を経て、ロストク大学教授、エルランゲン大学の組織神学教授となる。

私たちが感謝するのは、どのような場合かを考えてみる。

一つは、誰かから何かをプレゼントされたときである。また、誰かに何かしてもらったときである。いずれにしても感謝には対象となる人物があり、その人に向かって感謝をささげることになる。しかし、プレゼントしてもらった相手への感謝は、お誕生日やクリスマスなどを考えてみても、その時に限られることが多く、永続することは少ない。それに対し、誰かに何かをしてもらった感謝は、永続することが多い。誰かに親切にしてもらったこと、誰かに助けてもらったことなど、それは何時までも自分の心のうちに残り、思い出しては感

謝で満たされる。

そしてこの感謝は人を変貌させる。誰かにしてもらった感謝は、暗い人を明るくするし、やがて自分もあのような人になりたいという願望を起こさせる。そのような時、人は「おかげ」という言葉を使う。「私が今日あるのは、あの人のおかげである」と。

英文では、この「おかげ」という言葉が、dependence と書かれている。これは、より頼む、依存するという意味でもある。わたしの場合、これらの言葉を使って次のような文章を作ることができる。

「私は、小西先生のおかげで称名を知ることができ、主の御名を称えることにより主の贖いにより頼み、救いの望みを持つことができた」

アガペー

我等のなほ弱かりしとき、キリスト定まりたる日に及びて、敬虔な
らぬ者のために死に給へり。それ、義人のために死ぬる者ほとんどな
し、仁者のためには死ぬることを厭わぬ者もやあらん。然れど我等が
なほ罪人たりし時、キリスト我等のために死に給ひしによりて、神は
我等に対する愛をあらはし給えり。(ロマ書5・6-8)

ここにあらわされた愛をアガペーと言い、ここに示された御言葉が私たちに
とって最大の「おかげ」なのである。

イエスもパウロも、信者同士が相愛することを勧めておられる。しかし、我々
はアガペーは実行不能だと、始めから諦めている。だが、前節にも述べたよう
に、私達は、称名することにより神からアガペーを実行したものと認められて
いる。称名は、救われるための手段となり、心を盡し、思いを盡し、精神を盡
す神への愛ともなり、隣人を愛する愛ともなるのである。しかも、これらの愛
を、神はアガペーと見做してくださるのである。私たちは、これらを小西先生
から教えて頂いたのである。

そして、今でも称名し、目の前に置かれたことを懸命に成そうとする。しか
し、神はこれらのことを、全てキリスト者の自由から出た行為と見做してくだ
さるであろう。たとえ、世の中の人には愚かなことと思われても…。

小西先生の信仰の友と師と友

内村鑑三先生（1）

小西先生がキリストに捕らえられたのは、中田重治氏の講演会で、「イエス・キリストの血凡ての罪より我をきよむ」という言葉に感銘を受けられた時であり、その後、直ちに受洗しておられる。内村先生の集会に参加されたのはその後のことであった。先生、20歳、一高にご在学中のことであり、既に小石川白山教会に求道者として席を置いておられたのである。先生は、一高卒業後、東大に進まれたが、学生時代、日曜日は、午前中は教会に出席され、午後は内村集会に出席して過ごされたということである。

先生は、一つの主義に凝り固まるということはおありにならなかった。信仰生活の出発点から既に教会・無教会の相違にこだわらず、終始「十字架の贖い」が先生の信仰の基礎になったことが分かる。それが、内村先生との邂逅により、より強固に、より永続的に育ち、やがて、「称名」に至ったと思われる。

内村鑑三先生（2）

内村先生は、ロマ書3章21節の「然るにいまや律法の外に神の義は顕れたり」という個所を「今や立法道德とは無関係に」と説かれたが、このことを先生は何度となく、我々に説明された。律法は、人にそれを行うことを命ずる。しかし、自分はそれを完全に行うことができない。それでは、自分は罪人のまま、滅びるしかないのであろうか。そうではない、今ここに、イエス・キリストが十字架の上に、自分に代わって罪を贖われた。その贖い、すなわち神が下さった恵の賜物によって、律法とは無関係に自分は救われる。という信仰が若き日の小西先生に確立されたのである。

内村先生は、無教会の信仰を日本に確立した方である。「救いは教会の中にあり」というモットーに対して、教会の外にも救いありとして、「信仰のみ」という言葉を掲げられたのである。人が救われるのは他のなにものにもよらず信仰のみによる。これは聖書の精神である。しかし「信仰のみ」という言葉は、しばしば自分の信仰として理解する過ちを犯す。神よりの賜物を自分が作り上げたものと考え、それを堅き信仰として誇り、やがて人の信仰を批判したりするようになる。小西先生は、このような人を鼻持ちならないクリスチャンと言われた。

内村鑑三先生（3）

先に述べたとおり、言葉を変えれば「人は信仰によって救われるのではなく、主の贖いによって救われる」ということになる。この間の消息については、小西先生のロマ書3章21-26節の講解に明瞭に述べられている。

先生の称名の根拠は、ロマ書10章9-13節にあるが、前述の箇所とともに、内村先生が特にその部分を強調されなかったのは、この部分の解釈を後から来るものに譲られたのであろうと小西先生は言われた。また、内村先生は、「人の信仰においてなしうることは、十字架を仰ぎ見ることである」と言われた。これに対し、再々述べたとおり、小西先生は、「主の御名を称える」ことを提唱された。いづれも、自分の信仰ではなく、主の贖いによって救われるための人間のなしうる方法として、これらのことを主張されたのである。

内村先生が、キリスト教の最も重要なところを明らかにされたとすれば、小西先生はその土台の上に、「どこをどう押さえれば救いを得ることができるか」を、無学の唯人に分かりやすく説かれた、ということができよう。その意味で、私は仏教浄土門における法然と親鸞の関係に似ているように思えてくるのである。

島村清吉先生

1863年大阪に生まれ、1926年奈良県郡山にて逝去。先生は生涯を中学校講師として過ごされた。1902年よりご逝去まで、旧郡山中学校の教師でおられた頃、休日を利用して、仏教の講義を続けておられた。小西先生は、学生時代、郷里に帰られた折、1918年より通算30回ほど、島村先生の講義を聞かれ、多大の感銘をお受けになったとのことである。

島村先生は極めて誠実な方であり、またすぐれた能力を持っておられ、その高潔な人格は先生に接する人々に大きな感化を与えられたとのことである。授業には勿論、無遅刻、無欠勤、ある時学校で生徒のストライキがあった時も、先生の授業の時は教室に行かれ、生徒席の方に一礼をして職員室に帰られたとのことである。

先生の授業について、次のような文章が残されている。

「その教室に臨むや、嚴威犯すべからざるもまた懇切の至情は自ずからその言動に溢れ、生徒の脳裏に深き印象を刻しこれをして終生先生の徳化を亡失すること能はざらしむ」

そのため、先生の名は校外にも知れ渡り、いくつもの学校から時には旧制高等学校からも招聘されたが、地方都市の中学校の一教師として一生を終えられたのである。

島村清吉先生（2）

先生は親鸞の教えを信奉しておられたが、仏教の知識は浄土門に限らず、多岐にわたられた由である。これも小西先生からお聞きしたことであるが、島村先生は「仏教を数学的に研究している、なんでもいつでも質問してください」と言われたことがあった由である。或る時、先生が銭湯に行かれた時、同じ湯船に入ってきた一人の人が、よい湯加減に、「ああ、極楽、極楽」と一人ごちした。その時、先生は、「こんなすぐ隣に本当の極楽をよく知っている者がいるのに、それをこの人は知る由もないのだな」と慨嘆されたそうである。

島村先生は、自責居士、とか外賢という雅号を持っておられた。何れも仏典からとられたものであろうが、読んで字の通り、自らを責めること厳しく、自分は外から見れば賢く見えるが、うちは愚かな人間である、という意味に理解される。つまり、私達の言う罪人意識に徹しておられたものと思われる。

小西先生はこのような方から、浄土門仏教を聞かれた。小西先生がしばしば言っておられた、宗教は感情でなく知の上に立っているというご意見。先に述べた仏教浄土門とキリスト教の信仰とのかかわり、特に称名についてのお考えは、この時学ばれたことを元にして、信仰上の思考と経験を繰り返された結果と思われるのである。島村先生の集まりは、寺院に属するものでなく、いわば、仏教における無教会派と言ってもよいものである。このあたりにも、両先生の共通性について、私は考えさせられるのである。

ミス・ローラ・モーク先生（1）

1886年米国オクラホマ州ドーバーにて生まれ、1962年同地にて天に召さる。

1914年～1953年宣教師として在日、小石川白山教会に籍を置き、伝道に従事される。第2次大戦中は日本の抑留所にて過ごされる。

小西先生は、1918年10月モーク先生のバイブルクラスに出席されてから、同先生が1958年アメリカに帰国されるまで、子弟の関係を続けられたわけである。先生が帰国の途に就かれたとき、日曜礼拝で、「モーク先生の旅路安かれ」と小西先生が万感を込めて祈られた情景が忘れられない。

モーク先生は、アメリカ人としては小柄な静かな美しい婦人であった。…小西先生からお聞きした逸話を2、3ここに述べてみよう。

日米関係が険悪になったころ、開戦を予想して両国とも、相手国に在留していた人々を故国に帰還させるため、お互いに交換船を派遣した。しかし、モーク先生は交換船には乗船されることもせず、愛する弟子たちのいる日本で苦しみを共にすることを選ばれた。そして、戦争末期のこと、アメリカ人は皆処刑されるといううわさが収容所を駆け巡り、モーク先生も死の恐怖にとらえられたとのこと。その時、ふと、暗い部屋の隅に人がたたずんでいる気配に、そこに見つめると、それは主イエス・キリストであることがわかった。主は「私を見つめていなさい」と言って姿を消されたそうである。その瞬間、恐怖は去って平和が来たというお話。

ミス・ローラ・モーク先生（2）

先生は、戦後の日本で心身両面に於いて、大きな活動をなさったと聞く。日本もやがて復興期に入り、白山教会も新しく建て替えられた。新しい教会堂を見上げて、先生は次のように言われたそうである。

「神は人の手にて造れるものの中に住み給わず」と。

実は私の妹、水野光子はモーク先生を存じ上げていた。というのは、妹がOLであったころ、職場の基督教研究会に入会したことから、受洗し白山教会に籍を置くようになった。このことは私が求道を始めた一つの動機になったことを、書き添えておこう。

モーク先生は、身をもって真のクリスチャンの姿を見せて下さった方であり、小西先生に大きな影響を及ぼされた師のお一人であったのである。